

平成26年度西宮文学案内
春講座 第2回刻まれた足跡—甲子園球場

日時：2014年6月15日（日）14時

場所：なるお文化ホール

講師：後藤 正治（ノンフィクション作家）

後藤

皆さん、こんにちは、ご紹介にあずかりました後藤正治と申します。今日は甲子園球場にまつわるお話をしろということで、喜んでこちらにまいりました。

私はノンフィクションという世界で、かれこれ30年余り仕事をしてまいりました。

ここまで何冊くらい本を書いたのか、数えてみると30冊ほどありました。この中には、エッセイ集とか短編集もあって、それをも含んでの数ですが、平均すると一年に1冊程度本を出してきた勘定になります。小説家の人は年3冊くらい書く人が多いとか。30年余やると100冊以上書いている方が多いと思います。私は小説じゃなく、ノンフィクションの分野なので少なかったのですが、売れる作家ほど出版社からの注文は多いもので、私はあまり売れない作家として歩んでまいりましたので、この程度の冊数になっているのかなと、自分で納得しているところです。

この仕事を始めた最初の何年間は医学とか医療の分野を中心にやっておりました。人工心臓や移植医療の分野における研究者や医学者の仕事、それにかかわる患者たちのノンフィクションを書いていた時代がありました。

その後、スポーツのことを結構書くようになりました。30冊のうち10冊ぐらいがスポーツに関わる本が占めているかなと思います。分野でいえば、プロ野球、ラグビー、ボクシングなどです。

歳をとってきたせいでしょうか、表現者の世界に心惹かれるものを覚えて、近年では詩人の茨木のり子さんの評伝（『清冽』）を書いたり、画家の物語（『奇蹟の画家』）を書いたりしております。また朝日新聞の朝刊で天声人語というコラムがありますが、最も優れた書き手ではないかといわれた深代惇郎さんの足跡を辿った本（『天人』）を手がけたりしています。

世代と共に、関心を寄せる分野が移ってくるように思います。書くことからはやや遠ざかっていますが、いまでもスポーツを見たりスポーツ・ノンフィクションを読んだりするのは好きです。

さて今日は甲子園に関わる、「刻まれた足跡」というテーマでお話しさせていただきます。

思い返しますと、これまで甲子園にはよく足を運びました。行くたびに思うのですが、この球場だけが持っている固有の趣があるように思えます。わくわく感と申しましょうか、高揚感といいますか、そういうものを覚える不思議な球場です。スタンドに座ると、空が

広いと言いますか、開放感があって、浜風が感じられて、これが心地良く、ビールもうまい。

反対に、ビールが美味しくないのが東京ドームです。可愛い娘さんが背中にタンクを背負っていて、そこから紙コップに注いでくれるのですが、どうも美味しくない。恐らく空調の関係だと思うのですが、一般にドーム球場は好きになれない球場です。

海外のスタジアムも行きましたが、ヤンキーススタジアムは風情があっていい球場だと思いました。シカゴにリグレースタジアムという球場がありまして、100年以上の歴史を持っています。ここはナイター設備がない。野球というのは昼間するものだというので、そういうコンセプトを頑固なことを守り抜いている球場で、趣があります。

さまざまな野球場がありますが、やはり甲子園というのは特別な球場であると思います。何が値打ちなのかといえば、歴史ということになりましょうが、古ければ尊いのかといいますと、それだけはないと思います。

甲子園球場の名を知らない日本人はいないと思います。ところが、西宮市に甲子園があるというのは知らない人が案外いるんですね。関西の方にとっては当たり前ですが、東北とか九州の方に、甲子園球場はどこにありますかと訊くと、大阪か、兵庫県のどこかでしたかといった声が多い。西宮市＝甲子園というのに結びつかないという人も結構おられる。西宮市にとっては残念ですが、それほどのブランドをこの市が抱えているというのは誇りに思っていることだと思います。

甲子園球場の「いろは」について触れておきたいと思います。

球場ができたのは大正13年、1924年。今年で90周年ということで、90年の歴史を持っています。

甲子園球場は2つの野球のメッカです。一つは高校野球。戦前で言いますと、全国中等学校野球大会の試合会場でありました。もう一つはプロ野球、阪神タイガースのホームグラウンドです。

全国高校野球大会の夏と春の選抜大会はずっと甲子園球場で行われていたように思われがちですが、当初は豊中球場および鳴尾球場という球場があったのですが、ここで大会が行われていました。ところがだんだん、人気を呼んでお客さんを収容しきれなくなって、大きな球場を作ろうということで、阪神電鉄が甲子園球場を作った。完成が大正13年で、このときが全国中等学校野球の第10回大会です。それ以降、中学・高校野球のメッカは甲子園になっていきました。

少し余談になりますが、甲子園球場は3年前、新しくリニューアルされた球場になりました。旧球場とはかなり変わりましたが、原型は残ったと思います。蔦の外壁も、まだ蔦が生えかかっている程度ですが、雰囲気は残っています。

甲子園球場のリニューアル案が議論されていた時期、ドーム球場案もあったようです。甲子園球場を屋根付きのドーム形式にして、人工芝を敷いた東京ドームのようにするといったプランがありました。すぐ立ち消えになったようですが、プランとしてはありました。

私は絶対反対という趣旨の原稿を新聞に書きました。——“甲子園球場をドーム球場にするというのは、法隆寺の築地塀をコンクリートで固めるようなものだ、愚かなことをしてはならない”と。

後日、阪神電鉄の役員の方に、「あのエッセイはこたえました」と言われたことがあります。もちろん私の原稿でプランがどうこうなったというわけではありませんが、甲子園の原型がリニューアル以降も維持されているというのは、大変喜ばしく、嬉しく思っております。

今日DVDを2つ持ってまいりました。ひとつは甲子園球場80周年のさいに作られたもので、高校野球の歩みをたどる映像が収録されております。

<映像約5分〜>

皆さんいかがでしたでしょうか、懐かしい顔ぶれが何人か出てきましたね。清原も、松坂も、松井も、皆18歳、17歳の高校生のあの時代があったわけですね。

思い出に残る高校野球というのは、世代によって異なると思いますが、私の場合、先ほど画面にチラッとでてきましたが、青森・三沢高校の太田幸司さんがまず浮かびます。彼には甲子園の思い出を聞いたこともあります。

太田さんは甲子園で活躍してアイドル的なスターになりました。高校を卒業後、近鉄バッファローズに入り、その後タイガースのユニフォームも着ました。今は野球解説者として活躍されています。

高校時代の思い出を聞いたときに、いくつか印象的な話を聞きました。青森県の三沢というところから甲子園まで、どうやって来たのですか、と訊きますと、前日の夕方、夜行列車で青森駅を出ると朝に東京駅に着く。新幹線に乗り換えて、新大阪に着いて、そこからバスで甲子園に来たという。二年生の夏、生まれて初めて大阪に来て、こんなに暑いところで野球ができるんだろうかと思ったくらい暑かったというのですね。甲子園については写真でしか見るのがなかったので、実際に見て、鳥肌が立ったと言っていました。「こんなところで野球ができるのか」「こんなところで、野球をしてもいいのだろうか」という風に思ったくらい、感無量な気持ちになったといえます。

三年の夏の甲子園では、三沢高は決勝で愛媛の松山商高と対戦し、延長18回で引き分ける大熱戦となりました。この試合は伝説になっていますけれども、疲れましたか？と聞くと、太田さんはこう言っていました。当時ピッチャーはチームに一人しかいないような状況で、毎日投げるのは当たり前、完投が当たり前なので、特に疲れ切ったというほどではなかった。むしろ疲れてきて、その分、力が抜けていい球が投げられた、というのです。ピッチングでよく「力を抜け」と言われるのですが、これはやろうとしてもなかなかできないそうです。力を抜くとボールが伸びる、キレが増すといいますが、アタマではわかっているてもできない。延長18回投げた日は、自然と力が抜けて、生きたボールが行っていったんではないか、と言っていました。

太田さんはプロ野球に入ってそこそこ活躍しましたが、大投手にはなれなかった。コーチからずっと「力を抜け」と言われていたが、引退するまで力を抜くという本当の意味がわからなかった。ふと高校時代の延長18回投げたときが、自分にとってもっとも良い、力の抜けたフォームで投げていたんじゃないか、と語ったのが大変印象に残っています。

それからもう一人、甲子園で特に記憶に残っていますのは、浪商の尾崎行雄です。私はこの投手には思い入れがありまして、『スカウト』という本の中でも触れております。『スカウト』の主人公は長く広島カープに在籍した木庭教というスカウトです。

この取材の中で大勢のスカウトに会ったんですが、今まで最も速い球を投げたピッチャーは誰ですかと訊くと、一番よく聞かれた名が尾崎です。江川、池永、あるいは伊良部という名前も出ましたが、尾崎を一番手に挙げるスカウトが多かった。

尾崎は甲子園に3度出場しています。1年生時の夏、2年生時の春・夏ですが、法政二高というライバルチームがありました。投手は柴田勲。後に巨人で1番、俊足の外野手として活躍しましたけれども、当時はピッチャーをやっておりまして、浪商と法政二高がライバルであった時代が2年間続きます。1年生夏、2年生春はいずれも浪商は法政二高に負けます。2年生の夏、準決勝でようやく浪商は法政二高に勝ち、決勝で和歌山の桐蔭高校を破って悲願の優勝を果たしました。甲子園が大いに盛り上がった年でした。

私が尾崎さんに会いに行った当時、彼は浅草でワインレストランを経営しておりまして、ゆったりとした感じの初老のおじさんになっていました。私が一番聞きたかったのは、何故あんな速い球を投げられたのか、ということ。

当時スピードガンはありませんでしたが、150キロは軽く出ていただろうという話なんです。尾崎によれば、150キロはおそらく出ていたと思うけれども、140台の後半だったかもしれない。ただ、自分はスタミナがあったので、1回から9回まで、仮に140台後半だったとしても最後までそのスピードで投げたでしょうという。

彼は大阪の泉大津の出身で、お父さんは運送業をされていたそうですが、豊かな家でもなく、少年の頃の一番の楽しみは、カレーライスかじゃこめしをお腹いっぱい食べることであったといえます。ユニフォームも無ければ、スパイクも無く、スパイクは兄が履いていた地下足袋を借りてやっていたといっていました。ボール一つが宝物の時代でした。バットというのは、木の棒を手首のところだけ削って使う。同世代の野球少年は皆さんそうだったと思います。そういう時代に育った一人が尾崎です。朝から晩まで野球をして、家に帰ったら、じゃこめしかカレーライスをお腹いっぱい食べる。そういう野球少年時代を送った。

素朴といえば素朴、シンプルといえばシンプルな風景が浮かびますが、かつて、そんな時代が日本にあって、そういう時代そのものが、あれほど凄まじいストレートを生んだ背景にはあるのではないかなと思いました。

尾崎さんの話で一番びっくりしたのは、2年生の夏の大阪府大会、予選ですね、ここで

完全試合をやっている事です。完全試合というのは1回から9回まで、ランナーを一人も出さないで完封勝ちをすることですが、高校野球は力の違うチームが対戦することがありますので、完全試合自体は時々あります。珍しくはないのですが、この日の完全試合は、なんと9回まで27個のアウトのうち24個が三振だったということです。残りの3つはピッチャーゴロと内野ゴロだったということです、こういう形の完全試合というのはちょっと例がないものではないかと思えます。

尾崎さんは3年前に亡くなられましたけれども、甲子園との関わりで言いますと、郷里が泉大津で、親戚が大阪に住んでおり、夏の甲子園の時期になると毎年、お盆休みをかねて甲子園に来ていたと言っていました。バックネット裏に座って、1、2試合見て、黙って帰るという。それをお盆休みの日課にしていたという話が印象深く残っています。

私がノンフィクションを書くということで甲子園に通ったのは、高校野球ではなくてプロ野球の方でした。

それまで阪神タイガースのファンでしたけれども、ノンフィクションを書くということで野球を見つめたことはありませんでした。単に趣味、楽しみ事としてプロ野球を見るということにすぎませんでした。1985年はタイガースが21年ぶりに優勝した年でした。バース・掛布・岡田がクリーンナップを組んだ強力な打線の威力で優勝しました。

この翌年だと記憶しているのですが、文藝春秋という出版社の白石一文さん、今、直木賞作家となって売れっ子の小説家ですが、当時、私の担当編集者でした。白石さんから電話がかかってきて、今度、文春からノンフィクションの別冊を出すので、後藤さん、何か一つ企画を考えて下さいという連絡がありました。医学ものばかりもお疲れでしょうから、少し違う世界を書かれたらどうですか、という話をいただきました。

その時、私はふと、1年前のあのひと打席を書くのはどうだろうと思いました。

タイガースには当時、川藤幸三という代打の切り札がいました。今は野球評論家ですが。当時はここ一番という場面でしばしば殊勲打を打って人気者となり、「球界の春団治」という異名もありました。

私が思い浮かべたのは、川藤が打ったシーンではなく、逆に三振したシーンです。甲子園球場でのジャイアンツ戦で、9回まで巨人が4-2でリードしていた。9回裏タイガースがチャンスを得て、2死満塁となる。ここで代打・川藤がバッターボックスに立ちました。絶好のチャンス、ヒットを打てば同点、長打が出れば逆転というこれ以上ない場面です。

おおいに期待をしてテレビ画面を見詰めていたのですが、カウント2-3となって、最後、ど真ん中のストレートを空振りした。三振はよくあることですが、あんな絶好球をなぜ空振りしたんだろう……という疑問が頭の隅に残っていたんですね。

それで、白石さんから電話をもらったときに、どうしてバットに当たらなかったのか、さらに代打というのは一体何だろうという思いがかすめました。代打は、一試合一打席で

す。一振りで結果が出る。さらに毎試合起用されるとは限らない。不思議な職業というか、稼業に思えて、ノンフィクションとしておもしろいかなと思い、川藤への取材をはじめました。それが1986年の夏で、この年の秋に彼は現役を引退したんですが、3ヶ月ほど、密着取材をしました。甲子園にも良く行きましたし、遠征にもよく付いていきました。

川藤さんについては、イメージがありますよね。ユーモアチックというか、明るい人柄で、春団治という異名が似合う人、というイメージがあります。他にもニックネームが色々ありまして、スポーツ新聞の記者から聞いた話ですが、「2.00」というニックネームもありまして。その意味は、恐らく作り話だと思うのですが、「あなたの座右の銘は何ですか？」と聞かれたさいに、川藤が「2.00」と答えたというんですね。左右の目は？ と聞かれたと思い込んでそうと答えた。面白話なんですけど、彼ならありうるかもしれないと思える話ですね。でも実は大変な努力家でした。

川藤は、彼は福井県の若狭高校の出身で、ドラフト最下位で入団しています。ピッチャーとして入団するも、全然使い物にならない。バッティングもいまひとつ。何度か首になりかけるのですが、代打という一芸を磨いて、ようやく1軍に定着していきました。

9回2アウト満塁最後の打席で、ど真ん中の絶好球を何故空振りしたのかということも詳しく聞きました。川藤という人はこういう風に話す人でした。

マウンドに立っていたのは加藤初というリリーフエースだったのですが、速い球と鋭いスライダーを持つピッチャーです。1球目アウトコースのまっすぐがきて、見送った。2球目はスライダーを振ってファールになった。3球目は内側のまっすぐを見送った。4球目は外側のまっすぐをスライダーのタイミングで待っていたのでファールした…という風に、1球ごとに話していく。1球ごとの自身の心理も話すんですね。

私はびっくりしました。1年前の打席をそこまで良く覚えているのか、と。川藤さんには失礼ながら、ひょっとしたらこれは作り話をしているのかなと思ったんです。加藤初にも会いに行きました。彼は横浜に住んでいたんですが、彼も記憶力のいい人でした。1球目は外側のまっすぐを、2球目はスライダーの外側を、3球目内側のストレートを…というように話してくれる。球種とコースが川藤の証言と一致しているんですね。

私はプロ野球というのを今までそういう目で見たことはありません。1年前のある打席を、ピッチャーもバッターもそこまで覚えているのか、とびっくりしました。プロ野球も素晴らしい世界だ、という風に思いました。それがスポーツ・ノンフィクションをやっていく大きなきっかけになりました。

この打席については、川藤は、最後まで球種が絞り切れなかった、だから半呼吸、スイングが遅れた。「腹のなかの勝負でハジメに負けた」と語ったことを覚えています。この取材は「最後のひと振り」というタイトルで短編集に収録されています。

一流選手はすべて記憶力がいいのですが、江夏豊というピッチャーの記憶力はびっくり

するほどで、スコアブックを手に質問した日があるんですが、1回から9回まで、何故この球種をこのバッターに投げたのかというのを聞いても、きちんと話せる人でした。江夏のタイガース時代のことを書いたのが『牙』というノンフィクションです。

現役時代、江夏の最大のライバルはジャイアンツの王選手でありました。対戦を収録したビデオを持参してまいりましたので見てもらいたいと思います。そのあとでまた少しお話をしたいと思います。

<ビデオ約 20 分>

いかがでしたでしょうか、大変懐かしい映像で、私はすでに何度か見ているんですが、改めて二人の名勝負に引き込まれつつ見ておりました。

このビデオでは、王と江夏の2つの名勝負が収録されています。一つは江夏が勝った、一つは打たれて敗れたシーンですが、両者に2つの勝負についてインタビューする機会がありました。

まず、江夏の勝ちのシーンですね。シーズン354個という三振記録を王から取るつもりで三振を取ったものの、数を勘違いしていた。それで、もうひと回り、8人のバッターにあえて三振をとらずにまわして、次の王の打席で三振を取ったと。神業のような技ですが、王さんの発言では、これはちょっと作り話で、眉唾じゃないかという風に映像でおっしゃっています。私の取材した感触で言いますと、これはやはり江夏の卓越した投球術で、王まで三振を取らずにまわしたのは事実だという風に思えました。

映像に出ておりましたが、最後の球は真ん中高めのボール球を王選手はフルスイングをしていますよね。彼ほどのバッターになると、三振しない、空振りしない技術というのはあるわけです。内野ゴロを打つとか。当てにいくとか。そうすれば、三振記録を取られた選手としては記録されないわけで、充分それができたと思うのですが、そんなことは微塵も考えていない。球をスタンドまで打ち込むといった気迫でフルスイングして空振り三振しています。ここに、江夏の球の威力と同時に、王が偉大なバッターであった証が示されているように思います。

もう一つは、江夏が打たれた、逆転3ランホームランの場面が出てきています。これは見ておわかりのように、会心のあたりではないんですね。ライトのラッキーゾーンに入っています。今であれば、あれはホームランにならない。王選手の会心のあたりではないのですが、それでも3ランホームランになった。打ったほうが素晴らしいんですが、江夏の素晴らしさもこの打席の投球に出ていると思います。

というのは、キャッチャーの辻恭彦の証言にも出ていましたけれども、この日、王選手はまったくの不調だったんですね。江夏から9回まで3三振を奪われている。アウトコースの球に全く手がでない。江夏は球種が少ない投手で、まっすぐとカーブ、カーブといっても小さな変化をするものしかない。江夏は晩年、フォークとかも投げましたが、当時はカーブとストレートしかなくて、外側にカーブを投げると王選手のタイミングはまったく

合わずに打てないのは江夏も辻もわかっていたんです。カウント2－3になって、江夏は最後インコースのまっすぐを投げています。なぜ外側に投げなかったのか？ という点に江夏の江夏たる所以が示されている。

どうして外側に投げなかったのかと訊くと、外側に投げていれば打たれないのはわかっていた、しかしあの場面では、王選手のバットが出る範囲で勝負がしたかった、という。彼の美学なんですね。かつて、三振記録を王選手から取るという気持でぶつかっていったときも、王選手はフルスイングをした、逃げなかったと。今度は自分が逃げたくなかった、と。そういう意味のことを言っていました。江夏的というか、勝負としては外側に投げておくほうが安全で正しいんでしょうが、しかし、そういう美学の中で勝負をしたかったという気持ちも充分私には理解できるように思いました。

王・江夏に関わる取材で、とても印象に残っている話があります。

取材した当時、王さんは福岡ダイエーホークスの監督をされていました。試合前、監督控え室で往時の思い出をうかがったのですが、別れ際にポツリと、江夏とは12年間やったけれども、デッドボールが一つもなかったはずだとおっしゃったんですね。12年間というのは、江夏はタイガースに9年間所属しました。その後トレードに出されて南海ホークスに行き、さらにその後、セ・リーグに戻って広島カープのリリーフエースになっている。この3年間で足すと12年間になるわけですが、デッドボールが一つもなかったと。

これは大変意味深い話でして、一つは江夏のコントロールが素晴らしく良かった証であると思います。左腕ピッチャーというのはだいたいコントロールがそんなに良くないものですが、江夏は球が速い上に、コントロールが素晴らしく良かったということです。

もう一つ、意味しているものがある。江夏と王の勝負球は、インコース低めのまっすぐだったということで両者の証言は一致しております。膝元に来るまっすぐを打つか、打ち取られるか。それでもなおデッドボールがなかったというのは、ぶつける球は投げなかったことを意味しています。

打撃術がとても向上していますので、バッターに当たるか当たらないか、ギリギリのいわゆるダスターボールと言われるんですが、これはピッチャーの武器なんです。特にバッターの胸元すれすれの球を投げると効果的です。江夏はさまざまな投球術を駆使した投手ですが、デッドボールになるような球は投げなかった。そこに彼の美学があったように思えます。

『牙』を書くさい、江夏さんとは1年ほどお付き合いしましたが、なかなか難しい人で、わがままなところもあって、少し困ったこともあります。皆さんご存知のように、彼は現役生活を引退してから、覚せい剤の不法所持で捕まるという事件も起こしております。決して褒められることばかりはしていない。けれども、私は「江夏とは何か」と聞かれると、いつもこう答えてきました。グラウンドにおける江夏は素晴らしかった——と。

素晴らしいという意味は、素晴らしい記録をあげたというだけではなく、汚い技という

のか、そういうものを使わなかったという意味で素晴らしい投手だったという意味です。ライバル王選手と12年間戦って、打ったり打たれたり、勝ったり負けたりでしたが、ダーティワークをついに1度も使わなかった、デッドボールも一度もなかった。そういう点に、彼の野球人としての特筆すべきところがあるのではないかなという気がします。

記録を見てみますと、江夏・王の生涯の対戦成績は258打数74安打です。打率としていえば2割8分7厘。3割まではいかなかったのですね。本塁打20本、三振は57個となっています。非常に趣のある数字だと思います。258回対戦して、何球投げたかというのはわかりません。ただ、王は初球から打つバッターではなかったもので、だいたい1打席3〜4球は少なくとも投げていると思うのですが、仮に4球投げたとすると、1200球投げたことになる。1200球投げてデッドボールが一つも無かった。そういう風に考えることもできるかと思います。

甲子園に戻って締めくくりたいと思うのですけれども、江夏も、甲子園は大好きな球場だと言っておりました。先発して、ベンチからサクサクとスパイクで歩く感触を受けながらマウンドに登っていくのが大変好きだと言っておりました。

江夏は自分をピッチャーとして一人前に育ててくれた恩人として何人かの名前を挙げています。監督の藤本定義さん、それから先輩の村山実さん、ライバルだった王・長島と様々な人を上げましたが、そのうちの一人に藤本治一郎という名前を挙げました。おそらく皆さんご存知ないと思うのですが、甲子園球場のグラウンドキーパーという仕事を50年近くやっていた名物爺様です。江夏がタイガースに入団してきたとき、チーフのグラウンドキーパーでした。

この人は2つ特技を持っておられました。甲子園球場のグラウンドはイレギュラーが少ないグラウンドとして有名ですが、これは土の質と砂との配合がいいせいでしょうが、グラウンドキーパーが丹精込めてグラウンドを整備している賜物だと思います。とくに藤本さんが土をならすとイレギュラーがないと。

藤本さんにはもう一つ技があって、天気読みの名人だったことです。彼は瀬戸内の漁師の息子として育っていますが、そういう血筋もあるのか、とりわけ局地予報に優れていた。現在、気象庁の天気予報がとても正確ですが、かつてはそんなに当たらなかった。今夜、降るか降らないか。昼間、藤本さんはグラウンドにぼーっと立って、空を見上げている。湿気と皮膚感覚で降るかどうかわかる人だったらしく、夕方からぐずつくと彼が判断すると、試合前に水を撒くことを控えたり、あるいは撒かないときもあったということです。

江夏が入団して一年目の出来事です。ご存知のとおり鼻っ柱の強い、生意気な若者だったのですが、藤本さんから、怒鳴り上げられたことがあると言っていました。

オープン戦で先発した時に、ベンチ前で投球練習をしていたさいに唾を吐いた。それを見とがめた藤本さんが、江夏に詰め寄り、ここはお前達の職場じゃないか、職場に唾を吐くとはどういうことだ、と顔色変えて怒ったというんですね。実は唾を吐いたわけではな

かったらしく、風が強い日で口に入った土をぺっと吐き出ただけだったらしいのですが、藤本さんが余りに怒っていたので、ひたすら謝ったということです。こういう風に甲子園を愛している人がいるのだと気付いた。自分を一人前にしてくれた恩人ですということで、そんな往時のこぼれ話も語ってくれました。

甲子園に関わって、選手だけでなく、さまざまに関係者がいる。高校野球、プロ野球を通じまして、歴史がいっぱい詰まっている、思い出が詰まっている。それが甲子園を特別な存在にしているのではないかと思います。甲子園に一度は来た、あのスタンドに座ったという人は大変な数になるでしょう。甲子園はそういう人たち一人一人の記憶の中に残っている。その総和が、甲子園球場の意味ではないかなと思います。